

薬師寺金堂薬師三尊像に関する一考察 —両脇侍像における条帛非着用の観点から—

黒崎夏央

(東京文化財研究所文化財情報資料部アソシエイトフェロー／成城大学)

現在、奈良市西ノ京町に所在する薬師寺は、天武9年(680)に皇后の病氣平癒を願い、天武天皇により発願されたことが知られる。同寺金堂に安置される薬師三尊像は、三尊ともに理想的な身体表現がなされ、日本を代表する仏像として名高い。しかしながら制作年代に関しては、藤原京の本薬師寺で造立され、平城京遷都に伴い移坐されたとする移坐説(白鳳説)と、平城京の地で新たに鑄造されたとする新鑄説(天平説)と大きく二説に分かれ、長らく議論されてきたもののいまだ定説を見ていない。本像の源流となったと考えられる唐の都長安における同時代の遺品は極めて少なく、その造像の様相が明らかではないことが大きな要因であろう。

今回の発表では、同寺金堂薬師三尊像のうち両脇侍像(以下、薬師寺像)が条帛を着けないという形式的な点に着目する。条帛はその起源がインドにあり、唐代の流行を受けて日本でも7世紀後半に使用例が確認でき、奈良時代以降は従来の僧祇支にかわり一般化したものと考えられているものの、条帛が定着する具体的な時期やその様相についてはこれまで十分に検討されてきたとは言い難い。しかし、法隆寺金堂壁画や宝慶寺石仏群をはじめ、従来薬師寺像と造形面で共通性が指摘されてきた菩薩像の多くが条帛を着けているのに対し、薬師寺像が条帛を着けないことは、本像の特色の一つとして一考する価値があると思われる。

日本の古代寺院で出土した埴仏類および中国の初唐期の作例を通して、条帛が定着する時期について検討すると、藤原京本薬師寺において本尊が造立された時期は、日本においては条帛が登場し始める時期であり、中国においてはその着用がすでに一般化している時期であることが推察される。条帛が定着する以前の中国では、菩薩像の上半身は僧祇支を着ける、あるいは裸形で表される傾向にある。条帛の着用・非着用の観点からすれば、現存の薬師寺像は法隆寺金堂壁画よりも一段階古い形式的要素を反映していると考えられる。また中国の作例と照らし合わせた場合には、薬師寺像は、条帛着用という同時代の菩薩像の定型とは異なる選択がなされているともいえるが、条帛を着けない裸形の菩薩像には、インドの造像との関連が指摘される作例が多いことも確かである。

以上のような観点から、本発表では、薬師寺像が条帛を着けないことの歴史的な背景を探り、その制作年代の問題へと考察を進めたい。